近代の高麗神社

佐藤　　厚

Koma Shrine in Modern Times

SATO Atsushi

일본 사이타마현 히다카시（埼玉県日高市）에 고마（高麗）신사가 있다. 고마（高麗）라는 이름으로 알 수 있듯이 이 신사는 한반도와 깊은 관계가 있다. 삼국시대 북방의 강국이었던 고구려가 668년에 당나라와 신라 연합군으로 멸망된 후 고구려인 들은 일본으로 망명해 왔다. 716년 당시 조정은 그들을 현재의 사이타마현 히다카시에 이주시켜 고마군（高麗郡）을 설치했다. 고마군의 리더가 잣코（若光）였다. 잣코（若光）가 돌아가신 후 그를 모신 신사가 세워졌는데 이것이 바로 고마신사의 기원이다. 그리고 잣코의 후손은 대대 신사 궁사（宮司）를 맡고 현재 제 60대 고마 후미야스（高麗文康）씨에 이르고 있다.

그런데 고마신사가 알려진 것은 일본이 한반도를 강점한 시기 (1910-1945)다. 그 시대 고대의 한반도와 깊이 관련있던 신사의 역사는 일본과 한반도와의 융합, 일체화를 설한「내선융화（内鮮融和）」,「내선일체（内鮮一體）」의 상징으로 되었다.

올해는 고마군（高麗郡）이 세운지 1300년이라는 기념의 해이다. 이에 관련해서 필자는 근대기의 고마신사의 역사를 알고 싶었는데 선행연구에서는 단편적인 언급밖에 없었다. 그래서 필자는 신사가 1930년대에 간행한 자료나 당시의 일본, 한국의 신문기사를 조사하고 신사의 역사를 재현했다. 그 결과 다음과 같은 흐름을 밝혔다. 프인트가 된 시점을 7개 정리한다.

1. 1886년 내각수사관（内閣修史官）인 시게노 야스쓰구（重野安繹）가 고마가（高麗家）계도（系図）를 조사했다. 이로써 산사의 역사적인 중요성이 밝혀졌다. 2. 1900년에는 대한제국에서 일본으로 망명해 있던 조중응（趙重應）이 신사를 방문하여 당시의 고마가（高麗家）당주 오키마루（興丸）와 교류를 맺었다. 3. 1920년대부터 조선총덕부가 실시한 내지시찰단이 신사에 많이 오게 됐다. 이로써 한국 혹은 일본 국내에서도 신사가 알게 됐다. 4. 1931년에 고마가（高麗家）가『고마향유래（高麗郷由來）』를 발간했다. 이것은 고마신사

의 정사로 할 수 있는 것으로 신사의 관한 지식에 보급에 도움이 됐다. 5. 1934년에 민간의 후원단체인 고마신사봉창회（高麗神社奉賛會）가 조직됐다. 이로 신사는 더 알리게 되고 그 기부금으로 중수, 확장이 하게 되었다. 또 이쯤부터 신사는 출세명신（出世明神）으로도 알리게 됐다. 6. 1940년에는 당시 서울에 있던 조선신궁（朝鮮神宮）과 나무의 교환이 이루어졌다. 이것은 내선일체를 위한 종교적 의식이었다. 7. 1942년에는봉창회의 후원에 위한 새 건물이 완성했다. 그 후 1943년 이우에는 전승기원（戦勝祈願）등이 거행됐다.

그 역사 속에서 고마가（高麗家）는「내선융화」,「내선일체」라는 시대의 흐름과 관련이 있었다. 그것은 자신의 조산이 한반도에서 망명해 왔고 일본에 정주해서 가계를 이어 왔다는 자신에 역사에서 보면 당연한 일이었다고 생각된다. 1945년의 일본 패전과 더불어 한반도의 식민지배는 끝났다. 앞으로 고마신사는 영원히 일본과 한반도의 우호의 가교가 되기를 빈다.

１．はじめに

埼玉県日高市に高麗（こま）神社がある〈画像１〉。JR八高線、川越線の高麗川駅から徒歩20分の、今でも武蔵野の自然を感じられる場所に位置している。

高麗という名前からわかるように、この神社は朝鮮半島と深い関係がある。古代朝鮮の三国時代、北方の強国であった高句麗が668年に唐と新羅の連合により滅亡した後、高句麗人である若光（じゃっこう）とその仲間が日本に亡命してきた。716年、当時の朝廷は彼らを含め処々に点在していた高句麗人たちを現在の埼玉県日高市に移住させ高麗郡を建設した。若光の没後、彼を祀る

〈画像１〉高麗神社（筆者撮影）

神社が造られたが、これが高麗神社の始まりである。そして若光の子孫は代々、高麗神社の宮司を務め、現在の第60代の高麗文康氏に至っている。高麗神社の隣には、若光の子孫にゆかりのある聖天院勝楽寺という寺院が建てられ、そこに若光の墓もある。

さて今年（2016年）は高麗郡建郡1300年にあたり、高麗神社では様々な記念行事が行われている。2015年４月には旧高麗郡と隣接する８市３町とともに観光、文化、国際交流を中心とした地域の振興と活性化を目指した一般社団法人「高麗1300」を発足させた。また日高市の友好都市である韓国・京畿道の烏山市との交流も行なわれている。このように現在、高麗神社は日本と韓国・朝鮮の友好の印としての機能を果たしている。また同神社は戦前から出世明神としても有名であった[1]。

２．問題の所在

高麗神社の名が広く知られるようになったのは、日本が朝鮮半島を植民統治した時期（1910-1945）である。その時代、古代の朝鮮半島と深くかかわる高麗神社は、植民地時代に日本と朝鮮半島との融合、一体化を説く「内鮮融和」、「内鮮一体」の象徴とされたのであった。その痕跡は現在でも残っており、植民地時代に朝鮮を統治した朝鮮総督府関係者が寄贈した石灯篭などが残っている。筆者も高麗神社を訪れた際、1300年前の古代と、約100年前の近代の二つの歴史を感じることができた。この中、筆者は近代、すなわち植民地時代の高麗神社の歴史に興味を持った。すなわち明治から1945年（昭和20）にかけて、高麗神社でどのようなことがあったのかということである。そこで調べてみたのだが、これを通史的に整理した研究はないようである。

近代の高麗神社に言及する先行研究には、学術論文としては金光林［1993］[2]、

1　これは、戦前に参拝に訪れた政治家が総理大臣になったということに基づく。若槻礼次郎、浜口雄幸、斎藤実、平沼騏一郎、小磯国昭、鳩山一郎など。

2　この論文は１鳥居龍蔵の渡来文化論、２「日鮮同祖論」と両国古代関係史、３日韓古代関係史再発見（3-1坂口安吾の古代史観、3-2金達寿の朝鮮渡来文化をめぐる「旅」）、４文学作品の中の高麗郷（4-1小説によって再生された歴史､4-2詩人の高麗郷）からなる。この中、時代では１、２、４が植民地時代にあたり３が戦後にあたる。著者によればこの論文の目的は「主に高麗神社を対象にして書かれた多様なジャンルの文章を通じ、日本の中の朝鮮渡来文化を見る視点の変遷と、この神社を接点として行われた日韓両国人の相互理解の在り方」（p.31）を検討することである。筆者には植民地時代を対象とする１、２、４が参考になった。

糟谷政和［1999］[3]、［2003］[4]、［2005］[5]、金任仲［2009］[6]があり、それらは部分的に植民地時代の遺物や歴史に言及しているが通史的に整理してはいない。また一般書として刊行された高麗郷研究会［2013］[7]は、これまで知られていない高麗神社の話を収録していて貴重である。ただ、その中でも近代について

3　この論文は、１.はじめに、２.“地域の中の朝鮮”としての高麗神社、３.まとめ、からなる。これは大学で日朝交流史を講義する著者が、日朝の関係を考える教材として高麗神社がふさわしいと考え、高麗神社に関する資料を収集し解説したものである。注の中で金光林［1993］に言及する。

4　この論文は、１.はじめに、２.高麗神社境内に残る植民地支配の残影、３.戦前・戦後における高麗神社のもつ意味合いの変化、からなる。「はじめに」では、著者が1998年に高麗神社を訪問した時に気になっていた植民地時代の歴史遺物を調査し、その上で高麗神社を歴史教育の教材としようとする時の注意点を述べている。２では、「高麗神社」銘石柱、「朝鮮総督府関係高等官一同」銘石灯篭、「朝鮮総督府中枢院参議一同」銘狛犬、「高麗神社奉賛会理事一同」銘石灯篭、社殿神門扁額などの写真を提示しながら、植民地時代の歴史遺物を紹介する。３では、高麗神社で販売している冊子『高麗神社と高麗郷』から、中山久四郎の序文、1940年に朝鮮総督府中枢院調査課で編纂された『朝鮮の国名に因める名詞考』の「序」などを「内鮮一体」の意図を持っていた証拠とし、さらに『日高市通史』に収録される1920年代の朝鮮からの内地観光団、1923年「財団法人高麗王遺蹟保存会」の成立、1934年「高麗神社奉賛会」の設立に触れている。そして戦後の例として高麗澄雄の言葉を引いている（これは金光林［1993］の再引用）。そして戦後になったにも関わらず、現在でも販売されている冊子に植民地時代の名残である「内鮮融和」があることについて、「単なる歴史的史料としての意味をもつにすぎないと捉えればよいのだろうか」（p.74）と疑問を呈している。

5　この論文は、１.はじめに、２.日韓の大学生が感じる高麗神社の印象、３.18世紀中頃の高麗神社･聖天院の姿、からなる。これは大学で日韓（朝）交流史を担当している著者が、交流協定校である韓国の忠北大学の訪日研修団が来日した際、高麗神社を案内し、その感想を日韓両国の学生に聞き取りをし、考察を加え、さらに『武蔵国風土記』などをもとに18世紀中頃の高麗神社と聖天院の姿を考察し、さらに近年、聖天院に造られた在日韓民族無縁仏慰霊塔と八角亭などを写真入りで紹介している。

6　この論文は、はじめに、１.古代日本史と高麗（高句麗）人、２.高麗神社と高麗家、３.聖天院勝楽寺、４.植民地支配下の高麗神社、おわりに、からなる。そして「このように、朝鮮植民地支配下における高麗神社は、その境内に建てられている建造物だけを見ても、日本による朝鮮植民地同化政策の影響を強く受けている部分が多いことは否めない。（中略）当時植民地統治者たちは、朝鮮民族同化政策を目的に高麗神社を「内鮮融和」、「内鮮一体」の好例として、政治的に利用したのである。」（p.27）と結論を述べる。

7　本書は次の６章からなる。第一章 出世明神と六人の内閣総理大臣、第二章 高麗神社を訪れた著名人、第三章 高麗神社と高麗家の歴史、第四章 高麗神社の祭神、第五章 高麗神社の祭礼と建郡記念の祭り、第六章 高麗神社と高麗郡ゆかりの地・観光。この中、第三章が参考になった。

は部分的に言及するものの通史的な整理は行われていない。

そこで本稿では、先行研究のほか、当時の日本、朝鮮で発行された雑誌、新聞記事などの関連資料をもとに、近代の高麗神社の歴史を整理することを目的とする。また高麗神社の当主である高麗家の人々が、日韓併合、「内鮮一体」についてどのように考えていたのかについて考察を行う。

なお、文中の引用文献の中、韓国語文献は筆者が翻訳し、漢字は新漢字で統一した。人名は敬称を省略させていただいた。

3．高麗家の人々

まず高麗王若光の子孫であり、高麗神社の社掌を代々務めてきた高麗家の人々の中、本論で扱う近代以後の人物について簡単に紹介する[8]。

高麗王若光から第56代が高麗大記（1826-1900）である。号は桜陰。大徳周応および川越の朝岡操に就いて皇漢学及び詩文を学び、後に平田鉄胤の門に入り国学を学んだ。1849年（嘉永２）、父の後を受けて別当職を継ぎ、大峰修行をして権大僧都法印に任ぜらる。この時代まで高麗神社は神仏習合であった。1868年（明治元）、神仏分離に伴い、高麗神社社掌となる。明治の初めに地元の教育に専念し訓導および小学校校長を務めるも1892年（明治25）に辞した。1900年（明治33）に逝去。著作に『桜陰日記』32巻、『桜陰詩集』若干巻がある。

大記の次男が第57代の興丸（おきまる）（1867-1937）である。号は殿山。幼時より家学を承け東京で内田遠湖、平井魯堂に師事した。のち詩を埼玉県比企郡了善寺の嵩古香師に学んだ。1900年（明治33）に父の没後、高麗神社社掌職を継承する。1903年（明治36）に小学校教師を兼ね1905年（明治38）に辞した。この間、官林一部を受けて神域を拡張し、また雅文会に加盟した。詩文を研鑽し常に教育の不振を嘆いていたという。また後述する韓国人の趙重応（1860-1919）と最も親交があった。1937年（昭和12）に逝去。著作に『天啓詩集』、『殿山詩』がある。興丸の弟に文英がおり、彼は満洲の奉天で活動した。

興丸の長男が第58代の明津（あきつ）（1894-1984）である。明津は第二次大戦後、日朝協会埼玉県連の副会長を務めた。興丸の五男が博茂（1901-?）である。彼は朝鮮に渡り全羅南道の内務部などで活動した。戦後は日高町役場で勤務したほか、『高麗家詩集』、『双悦帖－高麗殿山古稀帖』、『飯能戦争秘話』などを刊行した。次いで第59代が澄雄、そして現在の第60代文康に至る。

8　『高麗郷由来』などを参考にした。

４．通史的概観

（１）高麗神社の「発見」と趙重応の訪問など

そもそも近世までは、高麗神社は武蔵国高麗郡の産土神であり、高麗家も豪族ではあったが、特に目立つ存在ではなかった。それが明治になり高麗神社の系図を調査した重野安繹（1827-1910）により一躍知られるようになった[9]。1885年（明治18）、当時、内閣修史局編修副長官を務めていた重野は、官命を受けて関東六県の古文書を探訪したが、高麗家に所蔵されている系図の史料的価値と様式の優秀性を高く評価した。それにより高麗家と高麗神社は史学界で注目され、多くの学者が訪れることになる。なお、高麗神社社内に掲示される『光栄録』によると、1882年（明治15）[10]に近衛師団の演習御統監の際、飯能市行在所に於いて「高麗氏系図」を天覧に供し、さらに1912年（大正元）11月陸軍特別大演習御統監の際にも川越市大本営に於いて天覧に供したとある。

続いて1900年（明治33）、朝鮮時代末期から大韓帝国期にかけての政治家であり、当時、日本に亡命していた趙重応が高麗神社を訪問した。趙重応訪問の前日、東京大学の国史学者・星野恒（1839-1917）が高麗神社を訪問した。それは、以前に書写した高麗家の家系図の中、原本との対照が必要な部分があったからである。星野を通して高麗神社のことを知った趙は、自分が日本に来て四年も経っているのに高麗神社のことを知らなかったことを嘆き、急ぎ訪問したのであった。興丸が古記録などを示すと、趙は感慨深く涙を流したという。趙は、高麗神社の扁額を書したほか、高麗興丸と興丸の弟・文英に漢詩を贈った。それらは現在も残っている[11]。ちなみに趙は文英と漢学者・根本通明を通して面識があったという。また李元栄［1939c］には、趙が高麗神社の隣の勝楽寺にしばらく滞在していたらしいことが書かれている[12]。趙は1906年（明治39）に特赦により朝鮮に帰国するが、この時、文英は趙に漢詩を贈っている[13]。

1910年（明治43）、日本が大韓帝国を合併した。京城（ソウル）に朝鮮総督府が置かれ、天皇直属の朝鮮総督が朝鮮の民衆を支配した。36年間の統治の中

9　金光林［1993：30-31］

10　『桜陰日記』巻二、p.303によれば、これは1883年（明治16）のこととなっている。

11　趙重応の漢詩は『高麗郷由来』に収録されている。

12　李元栄［1939c：15］李元栄は高麗神社の隣の勝楽寺を訪問した際、住職の横田氏より「先年朝鮮より来られた趙重応子爵は、私の寺に二年間もお泊りになりましたが、まだ生きておられるでせうか」という質問を受けている。

13　「丙午春日謹賀趙重応君遭特赦」（『高麗郷由来』）

で、日本は「内鮮融和」、「内鮮一体」を説き、朝鮮の日本への同化を進めていくのだが、その中で高麗神社も大きく変わっていく。

ここで1910年代に高麗神社に着目した人物を二人挙げる。一人は明治・大正期の外交官で退官後は著述家として活躍した小松緑（1865-1942）である。小松は1913年（大正２）に高麗神社を尋ねて興丸から神社について話を聴いている。その後、彼はこのことを『朝鮮併合之裏面』（1920年）の中、「桑槿一家説」の中で触れている。また彼は1916年（大正５）まで朝鮮総督府中枢院に勤務している。もう一人は人類学者・鳥居龍蔵（1870-1953）であった。鳥居は1918年（大正７）から雑誌『武蔵野』を主宰し、広く武蔵野の文化を研究したが、第１巻３号では「高麗」特集を組んで、武蔵野に於ける古代高句麗系渡来人の活動と高麗神社を紹介している[14]。

また1916年（大正５）には朝鮮の新聞『毎日申報』に高麗神社を紹介する記事が出ている[15]。

（２）1920年からの内地視察と高麗神社参拝ブーム

1919年（大正８）３月１日、日本の朝鮮統治の方法に大きな変化を迫る事件が起こった。それは三・一独立運動と呼ばれる朝鮮の人たちによる独立運動である。これをうけ朝鮮総督府は、従来の武力により統治する「武断政治」から、わずかながら朝鮮の人たちに自由を認める「文化政治」に統治方針を変更した。

そうした中、朝鮮総督府は、朝鮮の指導層にある人々に発展した日本の姿を見せ、日本への協力を促す政治宣伝のために内地視察団を派遣した[16]。その回

14　金光林［1993：31-35］

15　『毎日申報』（1916年８月30日付）「內地**의** 高麗村（１）**풍물이** 尙今髣髴」、同（1916年８月30日付）「內地**의** 高麗村（２）**풍물이** 尙今髣髴」

16　これを姜東鎮［1979：34］は次のように整理している。総督府がこれを本格化させたのは1920年代前半期の頃であり、その目的は「日本支配下で衰微していく植民地朝鮮と、第一次大戦の戦争景気で潤っていた日本を比較させることによって、朝鮮人に「日本の強大性」と「自立不能」を内容とする「独立不能論」を植えつける政治宣伝の意図から出た」ものであると述べる。さらに視察団の役割を「観光団は総督府官吏の引率の下に予定の日程に従って行なわれ、一行には総督府の活動写真班が同行し、これを国内の政治宣伝に利用した。旅行者は帰国後は「報告演説会」を開く義務を課され、民衆に日本の「先進性」「強大性」を宣伝しなければならなかった。これは、当局が彼らをオピニオン・リーダーとして地方の親日与論の造成に役立たせようとするもので、御用雑誌『朝鮮』にはしばしばその報告会の記事が見られる。」と述べている。

数は1920年代だけでも244回を数える[17]。こうした中に高麗神社も組み込まれていく。

1920年（大正９）５月、朝鮮総督府は朝鮮各道から選抜した参与官２名と郡守30名からなる内地視察団を派遣した。その際、活動写真班を同行させて記録映像を作成した。撮影地は出発地の京城から始まり、日本では下関、広島、神戸、大阪、京都、奈良、伊勢、名古屋、静岡、東京、埼玉である。埼玉の撮影地は高麗村と所沢飛行場であった。完成した映画は、７月から朝鮮の17カ所で上映され、観覧者の総数は約６万８千人であったという[18]。日本各地を紹介する中で朝鮮の人々の関心を惹いたのは、「大阪紡績工場に於ける鮮人女工の活動振りと其の遊戯、埼玉県の高麗村に於ける高句麗時代の朝鮮移住部落の状況、及内地の各地に於ける郡守歓待の状況等」[19]であったということから、当時の朝鮮の人々が高麗村に注目したことがわかる。

さて、活動写真班が高麗村を訪問した時、彼らは高麗興丸と面会した。この時、興丸は彼らに『高麗王若光事蹟』、『武蔵国高麗氏系図』、『高麗山聖天院記』を寄贈している[20]。

ちなみに1919年（大正８）８月から朝鮮総督府の政務総監を務めた水野錬太郎は大正８年に高麗神社を訪れたという[21]。ここから内地視察の高麗神社訪問には水野の意思も働いているのかもしれない。

この年から朝鮮からの内地視察団の訪問が相次ぎ、11月には本格的な内地視察団の嚆矢である慶尚北道儒林内地視察団が高麗村を訪問した。この視察団は、団長が申錫麟、団員が22名、同行者が７名の総計30名であった。10月22日に朝鮮の大邱を出発し、大阪、奈良、京都を経て東京に至り、11月５日に高麗村を訪問した。視察の報告書『慶尚北道儒林内地視察団感想録』[22]には、高麗興丸が先祖の地からの視察団に対して感激を抑えきれない様子を伝えている。いくつか拾ってみる（訳は筆者）。

17　チョ・ソンウン［2007］所収「1920年代日本視察団一覧表」pp.178-190。また内地視察に関する2010年までの韓国における先行研究は、パク・イェギョン「1920年代、内地視察団紀行文に表れた郷村知識人の内面意識」（『現代文学の研究』第42集、2010年10月）２頁。注４参照。

18　無記名［1920：168］

19　無記名［1920：169］

20　H生［1920：98］

21　本誌記者［1937b：80］

22　本資料は現在、国内の公的機関としては東洋大学図書館にしか所蔵されていない。

昼食の席で、若光王の直系の孫である高麗興丸の礼辞があったが、歓喜の至るのを抑えられず、感涙が襟を滴った。(『感想録』序文p.4)

興丸氏が歴史を説明すると、同時に自然に感旧の懐に堪えざるのみならず、涙溢れ、その傍らにいる人もみな悲惨の状を顕わした。(『感想録』p.27)

(引用者註：若光王の神社に参拝して) 興丸氏が朝鮮人礼拝の事実を告げうやうやしく文を読み上げると、また涙を流し嗚咽した。我が団員も涙を流さない者がいなかった。(同上)

ここから興丸の感動した様子がよく窺える。

続いてこの時に交換された漢詩を紹介する。興丸の「儒林団歓迎之一什七之一」と題する詩は次の通りである (訳は筆者)。

我有佳客、来自故国、一郷歓迎、宛如面識。(私にすばらしい客がいる、私の故国から来た人たちだ。地域を挙げて歓迎し、あたかも昔からの知り合いのようだ。)

これに対して団長の申錫麟は次のように詠んだ。

千年遺族此居郷、往事悠悠別恨長、最是無量慷慨意、竹林深処旧祠堂、(千年前の遺族がこの郷に住んでいる。過ぎ去った昔は悠(はるか)であり別れていた恨みは長い、これが最もやりきれないことだ。竹林が深いところに古いお堂がある。)

朝鮮に帰った視察団団員は雑誌に高麗村のことを記している[23]。

1921年 (大正10) 3月には、朝鮮総督府朝鮮人職員8名が訪問、5月には全羅南道の面長ら40名が訪問、6月には黄海道の儒生19名が訪問、11月には慶尚北道儒林内地視察団24名が高麗村を訪問している[24]。

このように高麗村への視察が相次ぐ中、同年8月、高麗興丸は「高麗王若光

23 観光者「内地에 在한 我同胞의 高麗村事蹟」(儒道振興會『儒道』1号、1921年2月)
24 日高市史編集委員会、日高市教育委員会編 [2000：742]

事蹟」を朝鮮総督府の機関誌『朝鮮』に掲載した。その序文で1900年（明治33）に星野と趙重応との訪問に触れた後、次のように述べている。

> 今や日韓併合して一国となれり。此時に当りて日韓上代の交渉を研究せんことは時局に益せずと云う可からず、況んや高句麗王室の皇国に対する関係を千載の下に証する祖考の遺跡を世間に知らしむることは、日韓両国民を親和せしむる効果なからんや。是れ予が名門の零丁に愧ぢて従来深く之を知らざるに拘らず今回意を決して此編を公にする所以なり。（高麗興丸［1921：126］）

ここからは1200余年、日本の中で高句麗の系統を守ってきた高麗家が、日韓併合という時代の中で日韓両国民を親和させることができるという時代的な大きな役割を持つという誇りと使命感とが感じられる。以下、論文では高麗王若光の事蹟と武蔵国高麗氏系図を収録している。

1922年（大正11）、３月10日から７月20日まで東京で平和記念東京博覧会が開かれた。これを見学するために訪れた朝鮮観光団は高麗神社も見学し、６月７日までに2100余名に上ったという[25]。

こうした多数の訪問客を受け、1923年（大正12）４月に高麗村に財団法人高麗王遺蹟保存会が結成された。これは高麗村の中野与一郎ほか26名が中心となって設立された会である。第一章の目的名称事務所の条文を見ると、「第一条本会ハ高麗山聖院寺勝楽寺及高麗神社ニ於ケル高麗王遺蹟伽藍社殿什器宝物ノ永存ニ要スル費用及朝鮮人参拝団其他公ノ参拝者ノ接待費用ヲ供給スルヲ以テ目的トス」[26]とあり、勝楽寺と高麗神社の建物や宝物の保存と当時増加していた「朝鮮人参拝団」の接待費用を供給するための会であった。第三条には本部を高麗村役場に置く、としていることから、地元自治体が中心となった事業であることがわかる。

1925年（大正14）３月には当時の朝鮮総督・齋藤実が高麗村を訪問している[27]。齋藤はこの前年1924年にも訪問したらしい。それは高麗神社が刊行した冊子『高麗郷由来』に収録された写真に大正甲子（1924年）の印がある書「敬

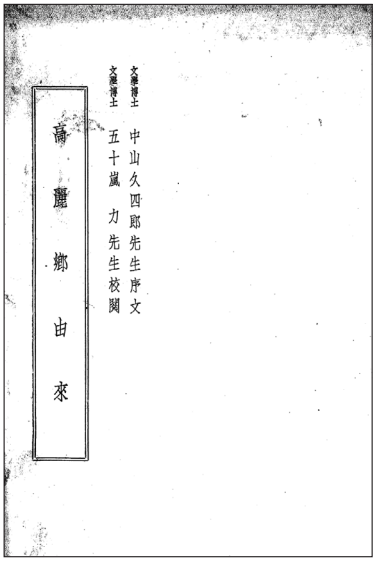
25　無記名［1922］「武蔵国の高麗村」（『朝鮮事情』1922年６月）
26　日高市史編集委員会、日高市教育委員会編［1997：490］
27　『朝鮮新聞』（1925年３月６日）

事而信」があることからわかる。1922年の「神怡心静」（朝鮮の倭城台で書かれたもの）の書もある。

1927年（昭和２）高麗神社を別格官幣社[28]に指定する動きがあった。埼玉県選出代議士・神谷弥平が国会に建議を行ったが[29]うまくいかなかったようである。

（３）『高麗郷由来』の刊行

1931年（昭和６）、高麗家では『高麗郷由来』を刊行した〈画像２〉。これは小冊子でありながら高麗神社の正史と言えるものであり、さらに一般に高麗神社に関する知識を普及させる役割も果たしたと思われる。高麗博茂によれば、これは朝鮮総督・齋藤実の賛助を仰いだものであり、その編纂には興丸、明津（興丸長男）、芳野（興丸四男）、博茂（興丸五男）があたっていた[30]。編者は高麗明津となっている。中山久四郎が序文を記し、五十嵐力が校閲を行った。



〈画像２〉『高麗郷由来』表紙

序文を書いた中山久四郎（1874-1961）は東洋史学者で、広島高等師範学校教授、東京高等師範学校教授、1929年に東京文理科大学教授に就任。戦後は明治大学講師を務めた。中山は1929年に刊行された「歴史上にあらはれたる内鮮の融和」（『中央朝鮮協会』）でも高麗神社に触れている。中山は高麗家とも親しかったらしく、1937年（昭和12）には高麗神社および興丸について次のように語っている。

28　国家に功績を挙げた忠臣や、国家のために亡くなった兵士を祭神として祀る神社。楠木正成を主祭神とする湊川神社など。

29　『官報』昭和２年３月14日。建議理由の末尾には次のようにある。「現時、同神社及墳墓地ニ日鮮人ノ詣スル者日ヲ追ウテ多ク朝鮮ヨリ我カ国ニ渡ル者必ス彼ノ地ヲ履ムヲ例トモセラル尚日鮮合併ノ今日日鮮融和ノ一端トシテ昇格スルヲ急務ナリト信ス」

30　高麗博茂［1974：427-428］

高麗村のことについて、歴史的にその研究を始めたのは私であつた。興丸翁はなかなかのしつかりものだ。漢学の素養もあり、農村振興と云ふことについては、常に心配してゐるやうだ。（本誌記者［1937a：68］）

『高麗郷由来』の中山の序文は次の言葉で締めくくられる。

今般同家は、祖先以来の高麗史伝を修成し、また高麗氏系図を編輯して、以て先徳を表し、且つ後世に伝へんとす。其本を思ひ祖を懐ふの至誠は以て追遠帰徳の美挙として人を感ぜしめ又内鮮融和の史伝と時務にも補益することも、亦大なりといふべし。（p.4）

次に本文の校閲を行った五十嵐力（1874-1947）は早稲田大学教授で、『源氏物語』研究の大家であった。博茂が『高麗郷由来』の原稿の中で文章が納得がいかない部分があったため、当時一面識もない五十嵐に手紙で添削を願い出たところ、懇切丁寧に添削してくれたという[31]。

この『高麗郷由来』は、本来の名称は『高麗郷由来及高麗王事跡』ではなかったかと思われる。筆者は1931年刊行の『高麗郷由来及高麗王事跡』と、1931年初版、1935年第三刷の『高麗郷由来』を入手した。両者を比べてみると似ている部分が多いが、いくつか違いがある。前者には冒頭に社殿や宝物の写真があるが、後者には無い。また後者には、前者の記述を補う補注があるとともに、記述内容そのものも増補されている。ここでは広く高麗神社の活動を探る意味から増補された『高麗郷由来』をもとに内容を見てみる。構成を示すと次のようである。（便宜上、番号を付した）

１．序文（中山久四郎）pp.1-4
２．高麗郷由来　pp.5-13
３．諸家文藻　pp.14-22
４．高麗氏系図　pp.23-34
５．高麗神社参拝諸名士芳名　pp.35-36

２．高麗郷由来の構成は次のようである。第一に高麗郡、高麗神社、若光に

31　高麗博茂［1974：427-428］

ついて簡単に触れ、第二に、高句麗および高麗家と日本との関係についての歴史を述べる。内容は高句麗の滅亡、高句麗遺民の亡命、高麗郡の成立、若光、高来神社、若光の死、高句麗人の苦労、高麗山勝楽寺の項目からなる。第三に高麗家の遺物である宝物４点、什宝５点を紹介する。第四に高麗氏系図の概要を紹介する。そして最後に、高麗神社の重要性と、高麗郡という郡名が廃止されたことの無念さを次のように述べる。

> かく内鮮一家の今日に於ては、この奈良朝以来、我国文化に貢献する所甚だ大にして、加ふるに武蔵野開拓の功績顕著なる高麗人の遺跡こそは、単に歴史的文化的価値の上からのみならず、あらゆる意味に於て、十分に尊重されなければならないのであるが、明治二十九年、この由緒深き高麗の郷名を廃されて以来、いまだに復活されないのは、かへすがへす残念な次第である。

ここには高麗家の「高麗郷」という名称に対する強い思い入れを感じることができる。彼らには若光以来、「高麗郷」を守ってきたという自負があったのであろう。

３．諸家文藻は、高麗神社に有縁の人々が詠んだ漢詩、和歌を収録したものである。氏名を挙げると次のようである。

> 五十嵐力、徳富蘇峰、大徳子宣、朝岡操、大垣退翁、井上淑蔭、権田直助、佐藤楚材、重野安繹、趙重応、新井周吉、高麗興丸、申錫麟、申郁均、佐々木安五郎、若槻礼次郎、茅原廉太郎、小林正盛、奥田光盛、崔麟、阿部充家、韓永源、鄭丙朝、恵徴和尚、丘盲和尚、高麗大記、高麗文英

４．高麗氏系図は、第46代良賢（1587-1656）の部分に次いで明治18年に系図を調査した重野の言葉が来て、さらに興丸による系図の話が出ている。その後に47代賢光の記述が始まり、57代興丸の事蹟までが記され、58代は当代として明津の名前が記されている。

５．高麗神社参拝諸名士芳名は、名前通り高麗神社を参拝に訪れた名士101名の名前が記されている。

（４）高麗博茂の朝鮮行き

1932年（昭和７）４月、興丸の五男・高麗博茂が朝鮮に行く。高麗神社の歴史からすると、朝鮮半島から祖先が渡ってきた1200余年後に、その子孫が朝鮮の地に行くという意義深いものである。この思いを興丸は次のような漢詩（「昭和七年四月八日送児博茂之朝鮮」）に詠んだ。冒頭部は次の通りである。カッコ内は筆者の試訳である。

> 先王求薬海東天、留住桃源絶世縁、吾子抱懐航故国、為予憑弔旧山川[32]。（若光様は薬を求めて海東にやってきた、そしてこの桃源郷に止まり故国との縁を絶ってしまった。私の子・博茂が思いを抱いて故国に渡る。私のために昔の山川を弔ってくれることを頼んだ）

この時、ジャーナリストで京城日報の社長も務めていた阿部充家（1862-1936）もこの歌に韻を次いだ漢詩（「次高麗興丸翁送令息博茂君赴朝鮮詩韻」）を残している。博茂は総督府地方官吏養成所で研修[33]した後、全羅南道の内務局に勤務した[34]。

（５）高麗神社奉賛会の設立

1934年（昭和９）、高麗神社をめぐり新しい動きが起こる。それは高麗神社を後援する団体、高麗神社奉賛会の結成である。本部は東京市麹町区山下町一丁目一番地の東拓ビルに置かれた。東拓ビルとは、戦前の日本において南満州鉄道株式会社（満鉄）と並ぶ二大国策会社であり、大東亜共栄圏内の植民地政策に関して特権的な利権を持っていた東洋拓殖の本社である。奉賛会については別稿で詳しく論ずる計画であるから、ここでは基本的事項だけを確認しておく。

まず高麗神社奉賛会の役員は次のようである。

32　高麗明津『高麗郷由来（三版）』（高麗神社社務所、1935年）

33　荻山生「高麗神社」［1938］（朝鮮総督府図書館『文献報国』4-1）

34　『職員録』（韓国史データベース）には、1939年には全羅南道の府郡島、1940年、41年には全羅南道の内務部に勤務している。

〈表１〉高麗神社奉賛会・役員一覧

役　職	氏　名	備　考
会　長	児玉　秀雄	伯爵。元朝鮮総督府政務総監を務める。
理事長	丸山　鶴吉	元朝鮮総督府警務局長を務める。
理　事	伊東　忠太	建築家。平安神宮、朝鮮神宮、高麗神社などを設計。
同	今泉　寛橘	実業家。
同	尾崎　敬義	東洋拓殖株式会社理事。
同	高島　米峰	言論人。
同	武井　文夫	言論人。
同	中山久四郎	東洋史学者。東京文理科大学教授。
同	永田秀次郎	官僚、政治家。東京市長、拓殖大学学長を務める。
同	宮田　　修	教育者。
同	三宅雄二郎	言論家。
同	白鳥　庫吉	東洋史学者。東京帝国大学教授。
同	下中弥三郎	平凡社創設者。国家主義の立場に立ち団体を組織。
同	関屋貞三郎	元朝鮮総督府学務局長。

内訳を見ると、朝鮮に関係する政治家、官僚、経済人、学者、言論人から組織されていたことがわかる。このほか156人の評議員がいた。

会則の中、目的と附帯事業は次のようである。

第二条　本会ハ武蔵国高麗神社及高麗王遺蹟ヲ顕彰シ、社殿ノ改修神域ノ拡張等ヲ行フヲ目的トス

第三条　本会ハ前条ノ外附帯事業トシテ内鮮同化ニ関スル文書ノ出版並ニ内地在住ノ朝鮮同胞ニ対スル社会的施設ヲ行フ

奉賛会では、『高麗神社の由来と奉賛会の趣旨』と『高麗神社小記』という二冊の冊子を作製した。

『高麗神社の由来と奉賛会の趣旨』の構成は以下の通り。（便宜上、番号を付した）

１写真（高麗神社社殿）、２高麗神社参拝記念撮影（1933年９月24日、1934年９月30日）、３高句麗の大版図（地図、年表）、４高麗神社の由来と

奉賛会の趣旨、５高麗神社奉賛会（会長、理事名簿）、６本会評議員、７高麗神社奉賛会会則、８申込書

この中、４高麗神社の由来と奉賛会の趣旨では高麗神社の歴史を述べた後、高麗神社の重要性について次のように述べる。

我国各地に朝鮮関係の遺跡は少なくない、そして皆相当の歴史を持つてゐるが、この高麗村位史実が確かで、遺跡が明確で、而もその子孫が連綿として千三百年間も伝はつてゐるといつた所は外にはない。内鮮一体の活きた模型であり、活きた証拠である。（p.5）

「内鮮一体の活きた模型であり、活きた証拠である。」という表現に迫力がある。次いで高麗神社の現状を嘆き援助を訴える。

かかる由緒深き高麗神社は、社殿も漸く曠廃し、神域も極めて狭隘で、この儘では或は神徳を傷くるの虞もないとはいへない実況である。茲に同志相謀つて、大方諸彦の御援助を仰ぎ、社殿を改築し、神域を拡張し、社格の昇進を願い以て益々神威神徳を発揚したいと考へた次第である。且つ内鮮一体を如実に立証してゐるこの神社を中心に、内鮮両民族の一層の親善融和の実を挙げんことを期する所以である。私共のこの微衷を容れて甚深の御後援を切にお願ひする次第である。（p.6）

続いて『高麗神社小記』の内容は次のようである。（便宜上、番号を付した）

１高麗神社参拝記念撮影（1933年９月24日、1934年９月30日）、２高句麗の興亡、３日本と高句麗との関係、４高句麗人の帰化、５高麗郡の建設と帰化、６高麗王若光、７高麗氏の活躍、８高麗神社、９高麗山聖天院、10高麗氏の家系、11高麗氏系図と大般若経、12古代に於ける日鮮の文化的関係、13高麗神社奉賛会会則

この中、「12古代に於ける日鮮の文化的関係」では古代朝鮮半島が日本に様々な宗教や技術をもたらした例を挙げ、次の言葉で締めくくる。

> 之を以て之を惟ふに、朝鮮は実に我が文化の母胎であり、その亡命の客の帰化し来るや、我国人はよく之を遇し、之を同化し来つたのである。これらの歴史的事実は、今日深く吾人の省みて範となすべきところであるにも不拘、これらの生ける史料なる我が高麗神社が、上述の如き深遠なる由緒を蔵し乍ら一向に埋れて世に出でず、特殊の学者好事家のほかは之を知るもの少なきはまことに遺憾の極みである。この史実の顕彰は確かに内鮮融和の問題に就きて百尺竿頭一歩を進むるものと確信して疑はない。（p.19）

すなわち「朝鮮は実に我が文化の母胎」であり、亡命の客が「帰化」してくると日本はこれを礼遇し同化してきた。その「生ける史料」である高麗神社が世の中に知られないというのは遺憾の極みであるという。ゆえにこの史実を顕彰することは内鮮融和の問題を進展させるものであるという希望を述べている。

高麗神社奉賛会による寄付の呼びかけの結果、新社殿が完成したのは1942年（昭和17）である。

（6）晩年の興丸

1937年（昭和12）、『朝鮮行政』に「本誌記者」が３回にわたり高麗村訪問記を連載する。その二回目で記者は晩年の興丸と対話をしている。その中で興丸は、自らのアイデンティティについて次のように述べる。

> 私の祖先が、此の国へ参りまして、非常に御厄介になりました。此の詩は是非に朝鮮の人たちに読んで戴きたいのです。（本誌記者［1937b：82］）

そして記者に「乙亥勅題池辺鶴」という題の漢詩を示した。この題は1935年（昭和10）の宮中歌会始のお題である。この題をもとに興丸は次のような漢詩を作ったのであった。（本誌記者［1937b：83］）

> 雙鶴蹁躚万里来　二羽の鶴がひらひらと万里を渡って来た。
> 求仙降此玉池隈　そして仙を求め、この玉池の隈に舞い降りた。
> 仁風一浴長忘帰　仁風を一たび浴びて長い間、帰ることを忘れてしまった。
> 瀛東春暖古釣台　日本（瀛東）の春の暖かさを感じる古釣台。

二羽の鶴（雙鶴）とは興丸の先祖、若光を指すものと思われる。そして日本に

やってきて、天皇の仁風を浴びて帰るのを忘れてしまった。日本（瀛東）の春は暖かい。これは古代の移住者が日本に馴染んだ姿を歌っていると解釈できる。ちなみにこのお題の昭和天皇の御製は、

楽しげにたづこそあそべわが庭の　池のほとりや住みよかるらむ

である[35]。この中の「わが庭」を日本と考えると興丸の歌の意味が一層はっきりすると思われる。この年、興丸は逝去する。

（７）1940年の紀元2600年記念と高麗神社

1940年（昭和15）は、神武天皇即位から2600年を数える重要な年であった。この年には様々な記念行事が行われた。年初の橿原神宮の初詣ラジオ中継に始まり、紀元節には全国11万もの神社において大祭が行われ、展覧会、体育大会など様々な記念行事が外地を含む全国各地で催された。11月10日には宮城前広場において内閣主催の「紀元二千六百年式典」が盛大に開催された。さて、これに先立つ４月３日の神武天皇祭には、高麗神社と朝鮮の京城にある朝鮮神宮との間で樹木の交換が行われた。高麗神社から朝鮮神宮へは桜が、そして朝鮮神宮から高麗神社へは五葉松と連翹（れんぎょう）が贈られたのである。

朝鮮神宮は、朝鮮神社という名称で建立され、1926年に朝鮮神宮に社号が改められた。その目的は現地の日本人および「新附国民」と呼ぶ朝鮮の人々に、日本の家観念を植え付けるためである。すなわち朝鮮神宮は朝鮮統治の必要から現地の人々を統治する手段の一つとして作られたものであった[36]。新田光子の整理によれば、紀元2600年すなわち1940年に朝鮮神宮で行われた祭典は、通常の例祭33種に加え、社頭で行われた特殊行事が17種ある[37]。この特殊行事の一つに高麗神社との樹木の交換があった。その様子を伝える新聞記事は「内鮮一体の神木交換」という見出しを付けている[38]。

式典は午前８時40分から始まり、高麗神社からは高麗文英、博茂が参加し、その他、高麗神社奉賛会の武井文夫、京城日報の御手洗社長が参加した[39]〈画

35　坊城俊民［1986：69］「おほみうた：今上陛下二二一首」（桜楓社）
36　新田光子［1997：198-199］
37　新田光子［1997：201］図表22　これは『朝鮮神宮年報』に基づく。
38　『毎日申報』（1940年４月５日付）
39　これは『昭和十五年　朝鮮神宮年報』（官幣大社朝鮮神宮、1941年５月）にも記録されている。

像３〉。

最初に厳粛な修祓式から式は宮司に高麗文英氏から桜を献納し、宮司から高麗博茂氏に五葉松を贈り、続いて宮司の案内で文英、博茂両氏、武井奉賛会長、御手洗京日社長が奥殿に参進して玉串を奉奠し、献木式を終えた。続いて植樹式に進み、拝殿に向かって阿知和宮司がまず先鍬を奉仕し、高麗両氏、御手洗京日社長、武井奉賛会長以下、拝殿の両側に次第の如く聖鍬を入れて奉仕したという。

阿知和宮司・朝鮮神宮宮司は「心からの内鮮一体を呼び起こす今日、内鮮人がともにこのような歴史上、結合していることを認識して、互に手をとって行かなければならないと考えます。」と述べた。一方、武井奉賛会会長は、「数千年という歴史の中、真の内鮮一体があるという事実が明らかに示されたものであり、たいへん恐縮である。皇国の御鴻恩に触れ、武蔵野に神として眠っておられる高麗王の魂も地下で喜んでおられることでしょう。朝鮮神宮から拝受した五葉松と連翹はきちんと育て、内鮮繁栄の基礎とする考えです。」と述べている。

高麗神社の神櫻
朝鮮神宮へ移植
内鮮一體の神木交換

阿知和宮司談
武井奉賛會長談

〈画像３〉「高麗神社の神桜、朝鮮神社に移植」『毎日申報』1940年４月５日

またこの頃、東京の明治神宮の杉の木を高麗神社に移植することも行われたという[40]。

さて、この樹木の交換の数日前、高麗神社を訪れた前田文夫（詳細不明）が、興丸の後を継いだ明津と対談したことを記している。この中で明津は内鮮一体

40 『東亜日報』（1940年４月14日付）

について次のように述べたという。

> 故地に滅びた高句麗は、日本の地に神として永遠に繁栄の魂を止めたのです、思ふに、高句麗や百済が衰亡の途を辿り始めて日本に亡命しだした飛鳥朝の末期から、奈良朝時代は大和民族の偉大なる包容力が最高度に内鮮一体を発揮した時です、（前田文夫［1944：276-277］）

すなわち内鮮一体を歴史の中に見て、飛鳥時代、奈良時代の日本に「偉大なる包容力」が存在したという。

続いて明津は、前に朝鮮人差別に関する質問を受けたことに関し、自分のアイデンティティを次のように誇っている。

> 前年、或る朝鮮生れの人で祖先が半島人であることにひけ目を感じませんか―と言つたやうな愚問を出した人があつたが、馬鹿々々しくて顔を見そ（ママ）やりましたネ、関東人と高麗人との因縁は史実から見て決して浅くはありません、今日の関東人が上代に於ける大和民族と朝鮮民族の同化に由来すると言ふのは決して過言ではなく、実に彼等こそは我々血統上の祖先の一部です、何十年かのうちに、心も形体も本当に融け合せて行く、これこそ大和民族の偉大なる抱擁力であり、民族発展の基調なのです。（同前）

すなわち明津は現在の関東人を、古の大和民族と朝鮮民族との同化からなったものであると捉え、それが将来も続いていくことが「大和民族の偉大なる抱擁力であり、民族発展の基調」と述べている。見方を変えると自分たちの祖先が現在の関東人を形成してきたという誇りを窺うことができる。

『毎日申報』４月14日付には、全朝鮮の高等官が高麗神社に灯篭を奉納することを決定したという記事が出る。これは実際に奉納され現在も残っている。また、奉納はこれ以外にも計画され、精神総動員朝鮮連盟でも高麗神社への献灯を計画していたようである[41]。

６月８日、第７代朝鮮総督・南次郎が高麗神社を参拝した[42]。新聞記事によれば、午前８時、総督府出張所を出発、一時間ほど国立の別荘に宇垣前総督を

41　『毎日申報』（1940年８月31日付）
42　『毎日申報』（1940年６月11日付）

尋ね歓談した。そして11時に武井（文夫）理事、村民多数が出迎える中、到着。高麗明津氏の先導で内鮮一体の象徴神である百済（ママ）若光王の神殿に昇殿、参拝の後、記念植樹をした。その後、総督は社務所の応接室で新井高麗村長、高麗明津氏、村の有力者10余名と午餐を行った。その中で次のような会話も交わされたという。

南「高麗さん、慶尚南道で郡守をしている高麗さんとはどんな関係なの？」
高麗「恐縮でございます。私の兄弟です。」
南「ああ、そうか」

朝鮮総督から直々に兄弟の話題が出てさぞかし驚いたことであろう。ただ、博茂が勤務したのは全羅南道であり慶尚南道ではない。

（８）1942年（昭和17）李王妃両殿下の参拝と高麗神社竣工式

太平洋戦争が勃発した翌年1942年（昭和17）。この年の８月、高麗村で朝鮮半島出身の男女学生が勤労奉仕を行ったという記事がある[43]。続いてこの年の大きな出来事は、11月に行われた李王妃殿下の高麗神社参拝と高麗神社の竣工式である。

李王妃殿下の高麗神社参拝は22日である[44]。参拝したのは、李垠（1897-1970）、方子（1901-1989）、息子の李玖の三名である。李垠は朝鮮王朝26代王・高宗の三男で、朝鮮王朝最後の皇太子であった。方子とは、李垠と1920年（大正８）に政略結婚させられた梨本宮方子である。李垠と方子夫婦も内鮮一体の象徴であった。

『毎日申報』（11月24日付）によれば、李垠らは午前８時30分に東京紀尾井町の邸宅を出発、10時30分に高麗神社に到着した。大津埼玉県知事以下、官民多数が出迎えた。三名は社殿を参拝した後、李垠が記念植樹を行い、奉賛会関係者らと社殿で記念撮影を行った後、隣の聖天院高麗寺に移り、仏前で焼香を行い、若光の陵に参拝したという。新聞には三名を案内した奉賛会理事長の丸山鶴吉の言葉が載せられている。ちなみに戦前に高麗神社を参拝した皇室関係者

43 「由緒深い高麗村に半島男女学生奉仕：朝鮮奨学会主催の農村研究練成会」（『毎日申報』８月６日付）
44 『毎日申報』（11月24日付）には22日とあるが、高麗神社の記録には21日とある。

は高麗神社の社内に掲示された『御参拝』によると次のようである。

〈表２〉戦前の皇室関係の参拝者

参拝年月日	参拝者
1920年（大正９）11月24日	山階宮藤麿殿下
1939年（昭和14）４月24日	伏見宮光子女王殿下
同前　10月27日	久邇宮邦昭王殿下
同前	東久邇宮俊彦王殿下
1942年（昭和17）11月５日	賀陽宮文憲王殿下
同前	昌徳宮王世子李玖殿下
同前	伏見宮博明王殿下
同前	李沖
同前　11月21日	昌徳宮李王垠殿下
同前	昌徳宮李王妃方子殿下
同前	昌徳宮王世子李玖殿下
1943年（昭和18）12月５日	昌徳宮李王妃方子殿下
同前	昌徳宮王世子李玖殿下

出典＝高麗神社、社内掲示『御参拝』による

これを見ると、方子と李玖は翌年の1943年（昭和18）にも参拝していることがわかる。ちなみに1942年（昭和17）11月５日の賀陽宮文憲王殿下を含む４名の訪問は、学習院初等科の訪問行事である[45]。

高麗神社の竣工式は27日に挙行された。この時の模様を『毎日申報』（11月28日付）は次のように伝える。

> 午前11時、美しい紅葉の高麗山の山麓に新たに造営された社殿前に奉賛会会長の児玉伯爵と理事長・丸山鶴吉氏ほか関係者多数であり、来賓として南大将を始めとして大津埼玉県知事以下、官民約300名が参列する中で式が始まり、修祓の後、丸山理事長の奉納目録献上があり、次いで児玉会長が奉答の辞を捧げ、その次に参列者の玉串奉呈により式が終わった。その後、社務所で簡素な披露宴があり、盛会裏に12時半に解散した。

45　『毎日申報』（11月24日付）

この時、奉賛会の会長であり当時は南方のジャワに勤務していた児玉秀雄は次のように挨拶している。

> これまで南方の事務関係で忙しく奉賛会長としての仕事を十分にできなかったことは申し訳ないが、丸山理事長の努力により重工され今日の奉告祭を挙行できたのはたいへん悦ばしいことである。聞くところによると、大東亜戦争以来、半島の同胞だけでなく内地人たちもこの神社に参拝する人が日々増えているということで、大変うれしく思っている。私の願いを言うと、この澄んできれいな聖地が内鮮間の因縁深い土地としてだけでなく、内鮮の歴史の一新の起源を建てたその事実が遠く南方まで伝わることを心の中で期待する。

（9）1943年（昭和18）から1945年（昭和20）敗戦まで

1943年（昭和18）５月３日、中央朝鮮協会と高麗神社奉賛会協賛の戦勝祈願が行われた[46]。中央朝鮮協会とは1926年、朝鮮総督府の元高官を中心として、朝鮮と関係がある財界人・ジャーナリスト・衆議院議員・貴族院議員・在朝鮮日本人などを会員として、東京において組織された植民地関係者からなる植民地協会である。

祈願祭は高麗明津の修祓から始まり、祝詞奉読、協会の専務理事である関屋貞三郎をはじめ、中山文学博士、井上前内務次官、速水京城帝国大学総長、藤田中将の順で玉串を奉呈し、一同による神酒が捧げられ終了した。続いて社務所の応接室で昼食をとり、武井理事の報告の後、中村久四郎による「武蔵野と内鮮文化の交流」という題目の講演が行われた後、二時に閉会した。次いで一同は聖天院を参拝し意義深い一日を送ったという。

６月29日、高麗神社の社格が、村社から県社に昇格した。

10月８日、文学報国会の会員の久保田、緒方、張赫宙ら20余名の文学者が高麗神社を参拝した。一行は８日午前10時、高麗村を訪問し、高麗神社に参拝した後、聖天院をはじめ高麗郡一帯を散策した[47]。文学報国会は1942年（昭和17年）５月26日に設立された文学団体であり、会長を徳富蘇峰が務めた。

10月14日には高麗神社が県社に昇格した昇格奉告祭が行われた[48]。奉告祭は

46 『毎日申報』（1943年５月４日付）
47 『毎日申報』（1943年10月10日付）、『文学報国』（1943年10月10日付）

午前11時開始。奉賛会長・児玉伯爵以下、南大将、井坂総督府東京事務所長と朝鮮関係者たち、また秋田雨雀、高島米峰など文化関係者、そして埼玉県知事と幹部職員、地方有志など約60余名の参列する中、大祓、開扉、供饌、祭文奏上の後、高麗神官、県知事、南大将の順で玉串の奉奠を終え、撤饌、直会と午後１時に終了した。

1944年（昭和19）１月29日、文学報国会の皇道朝鮮委員会12名が高麗神社を参拝している[49]。

５月13日、朝鮮総督・小磯邦昭が高麗神社を参拝した[50]。新聞記事によれば、小磯は警務局長、秘書官らを帯同し、高麗神社で正式参拝を行った。小磯は高麗氏の案内で参拝し、記念植樹を行った後、若光の墓、聖天院を訪問した。

６月１日、文学報国会の皇道朝鮮研究会が高麗神社に神木を献納した[51]。この日、午前11時から行われた神木献納式では、加藤武雄、張赫宙、津田節子ら10数名の作家が参加したという。

ここまでが現在入手した新聞、雑誌記事をもとに再現した高麗神社の近代史である。

５．結語

以上、本稿では、近代（明治から1945年まで）における高麗神社の歴史を整理した。まず時系列で重要なポイントを簡単にまとめる。第一は1885年（明治18）重野安繹による高麗家の系図調査である。これにより高麗神社の重要性が認識された。また1900年（明治33）には趙重応が高麗神社を訪れた。第二は、1920年代からの内地視察団による高麗神社訪問ブームである。これにより朝鮮、あるいは日本国内においても高麗神社が知られるようになった。第三に、1931年（昭和６）『高麗郷由来』の刊行である。これは小冊子でありながら高麗神社の正史と言えるものであり高麗神社に関する知識の普及に貢献した。第四に1934年（昭和９）の民間の後援団体である高麗神社奉賛会の成立である。これにより高麗神社はより知られるようになり、寄付金をもとにして重修、拡張が行われた。第五に1940年（昭和15）の朝鮮神宮との樹木の交換である。これは

48　『毎日申報』（1943年10月15日付）

49　『文学報国』（1944年１月20日付）これは発行日が参拝日の前になっている。可能性としては12月29日の誤植かもしれないが、とりあえず記事のまま掲載した。

50　『毎日申報』（1944年５月15日付）

51　『毎日申報』（1944年６月３日付）

内鮮一体に関する宗教的な儀礼であった。第六に1942年（昭和17）には高麗神社奉賛会の後援による新しい社殿が完成した。のち1943年（昭和18）以後には戦勝祈願などが行われた。

最期に、高麗家の人々の日韓併合、「内鮮一体」に対する思いを考察してみたい。1900年から1937年代まで高麗家当主を務めた興丸は、趙重応との交流、朝鮮からの内地視察団派遣への対応、『高麗郷由来』の編纂など、近代の高麗神社にとって重要な作業を行った。興丸の考えの背後にあるのは、一つには日韓併合という時代状況が、高句麗人が日本に移住、定着し代々継続してきたという家系を新しく意味づけ顕彰するものであったという意識、二つには、その家系が時代に貢献できるという使命感であったと考えられる。また、興丸を継いだ明津も、関東人が古代の大和民族と朝鮮民族との融合の中で誕生したと説いていたように、日本に定着した家系に対する誇りを見ることができる。しかし、日本による植民地支配が朝鮮の人たちに災いをもたらしたということは、高麗家の人々にとっても不幸なことであったと言わざるを得ない。

冒頭に述べたように、今年（2016年）は高麗郡設置から1300年目の年であり、様々な記念行事が行われている。第60代当主・高麗文康によれば、この記念行事を発案したのは第59代澄雄であり、それは高麗郡廃止100年後の1996年（平成18）のことであるという[52]。これは戦前、そして戦後・現代も高麗家の人々の高麗郷に対する思いが変わらないことを窺わせる話である。筆者も、高麗神社が今後は日本と朝鮮半島との平和友好の象徴としてありつづけることを願う。

続いて本論文に関しての課題を記す。第一に、史料調査の充実である。

第二に、高麗神社奉賛会の設立経緯および賛同人の研究である。今回、紙幅の関係で紹介しなかった資料とともに奉賛会についてより詳しく調べてみたい。

第三に、朝鮮の人からみた高麗神社の研究である。本文で見た趙重応のほか、今回扱わなかった崔麟、韓永源、鄭丙朝など高麗神社と関係を持ち、漢詩を残した人は数多いので彼らの生涯と漢詩の内容を併せて検討してみたい。さらに1942年（昭和17）に『高麗村』という詩集を日本語で刊行した韓植、親日派とされる近代作家・李光沫も高麗神社に触れている。彼らの詩の分析を通して当時の朝鮮の人における高麗神社がどのようなものであったかを調査してみたい[53]。

52　『民団新聞』（2006年１月１日）「武蔵国に根をおろし高麗郡建郡1300年…高麗文康」
53　韓植、李光沫については金光林［1993］が言及している。

〈参考文献〉

１. 一次資料

1-1 書籍

慶尚北道儒林内地視察団［1921］『慶尚北道儒林内地視察団感想録』（発行所記載なし）
高麗明津［1935］『高麗郷由来』（高麗神社社務所）＊初版は1931年発行
小松　緑［1920］『朝鮮併合之裏面』（東京堂）
武井文夫［1934a］『高麗神社の由来と奉賛会の趣旨』（高麗神社奉賛会）
　―　［1934b］『高麗神社小記』（高麗神社奉賛会）
日高町教育委員会編［1990］『日高町史・文化財編』（埼玉県入間郡日高町）
日高市高麗神社［2001］『桜陰筆記』（日高市高麗神社）＊原著者は高麗大記
日高市史編集委員会、日高市教育委員会編［1997］『日高市史・近現代資料編』（埼玉県日高市）
日高市史編集委員会、日高市教育委員会編［2000］『日高市史・通史編』（埼玉県日高市）

1-2 雑誌論文

荻山　生［1938］「高麗神社」（朝鮮総督府図書館『文献報国』4-1）
川島義之［1940］「高麗神社に参拝して」（国民精神総動員朝鮮連盟『総動員』2-9）
高麗興丸［1921］「高麗王若光事蹟」（朝鮮総督府『朝鮮』78）
高麗博茂［1974］「五十嵐力先生の思い出」（五十嵐力『源氏物語と文芸科学』教育社）
武井文夫［1937a］「古代に於ける日鮮同化」（『朝鮮行政』1937年２月号）
　―　［1937b］「古代に於ける日鮮同化（二）」（『朝鮮行政』1937年３月号）
本誌記者［1937a］「高麗村訪問記」（『朝鮮行政』1937年２月）
　―　［1937b］「高麗村訪問記（二）」（『朝鮮行政』1937年３月）
　―　［1937c］「高麗村訪問記（三）」（『朝鮮行政』1937年４月）
李 元 栄［1939a］「内鮮巡歴（一）、久遠の武蔵野に千載の名残を訪ふ」（『国民新報』４月23日号）
　―　［1939b］「内鮮巡歴（二）、五十代血に繋がる、これぞ『内鮮一家』の楔、埼玉県高麗村訪問」（『国民新報』４月30日号）
　―　［1939c］「内鮮巡歴（三）、柱も朝鮮づくり勝樂寺の書院・本堂、埼玉県高麗村訪問」（『国民新報』５月７日号）
無 記 名［1920］「郡守内地視察状況の活動写真映写」（朝鮮総督府『朝鮮』70）
無 記 名［1922］「武蔵国の高麗村」（朝鮮銀行調査部『朝鮮事情』）
無 記 名［1940］「高麗神社に夜灯奉献の件」（国民精神総動員朝鮮連盟『総動員』2-10）
Ｈ　　生［1920］「高麗村に関する事共」（朝鮮総督府『朝鮮』71）
南　　弘［1933］「高麗王事蹟と日鮮同化」（『日本精神講座』第一巻、新潮社）
中山久四郎［1929］「歴史上にあらはれたる内鮮の融和」（『中央朝鮮協会』）
前田文夫［1944］「『高麗神社』と千年前の内鮮親和」（『朝鮮同胞に告ぐ』、大東亜社）

1-3 新聞

『毎日申報』、『東亜日報』、『朝鮮新聞』

２. 二次資料
2-1 著作
姜 東 鎮［1979］『日本の朝鮮支配政策史研究―一九二〇年代を中心として』（東京大学出版会）
高麗郷研究会［2013］『六人の総理大臣が誕生最強の出世開運スポット強運パワーの「高麗神社」』（実業之日本社）
新田光子［1997］『大連神社史 : ある海外神社の社会史』（おうふう）

2-2 論文
糟谷政和［1999］「高麗神社（埼玉県日高市）を訪ねて」（『茨城大学人文学部紀要. コミュニケーション学科論集』６）
―　［2003］「高麗神社（埼玉県日高市）再訪－朝鮮植民地支配の残影」（『茨城大学人文学部紀要. コミュニケーション学科論集』13）
―　［2005］「高麗神社・聖天院（埼玉県日高市）について－“地域の中の朝鮮”を学ぶための教材研究」（『茨城大学人文学部紀要. コミュニケーション学科論集』17）
金 光 林［1993］「高麗神社からみた朝鮮渡来文化」（東大比較文学会『比較文学研究』64）
金 任 仲［2009］「古代日本と朝鮮渡来文化（１）－高麗神社と聖天院をめぐって」（『文芸研究』109）

2-3 その他
高麗神社ホームページ　www.komajinja.or.jp

〈近代の高麗神社：参考年表〉

西暦（元号）	高麗神社関係（月日.事項）	朝鮮および一般史
1886（明治19）	重野安繹、高麗氏系図を調査	
1896（明治29）	高麗郡、入間郡に編入される。	
1900（明治33）	星野恒、高麗神社を調査 趙重応、高麗神社を訪問 高麗大記逝去	
1910（明治43）		８．日韓合併、 初代朝鮮総督 寺内正毅就任
1916（大正５）		10. 第２代朝鮮総督 長谷川好道就任
1919（大正８）		3.1　三・一独立運動 ８．第３代朝鮮総督 齋藤実就任
1920（大正９）	６．朝鮮総督府活動写真班、高麗村訪問。高麗興丸、『高麗王若光』などを寄贈 ７．朝鮮各地で内地観光映画上映。高麗村、朝鮮の人々の関心を惹く。 11. 慶尚北道儒林内地視察団、高麗村訪問。以後、朝鮮からの内地視察団相次ぐ。	
1921（大正10）	３．朝鮮総督府朝鮮人職員８名訪問 ５．全羅南道面長ら40名訪問 ６．黄海道儒生19名訪問 ８．高麗興丸、「高麗王若光事蹟」を朝鮮総督府の機関紙『朝鮮』に掲載する。 11. 慶尚北道儒林内地視察団24名、高麗村訪問	
1923（大正12）	財団法人高麗王遺蹟保存会、結成される。	９．関東大震災、朝鮮人虐殺
1925（大正14）	３．齋藤總督、高麗村を訪問	６．朝鮮神宮、京城に建立
1927（昭和２）	２．国会で高麗神社を別格官幣社とすることを審議するも不成立	12. 第４代朝鮮総督 山梨半造就任
1929（昭和４）		８．第５代朝鮮総督 齋藤実就任
1931（昭和６）	『高麗郷由来』刊行 『高麗郷由来及高麗王事跡』刊行	６．第６代朝鮮総督 宇垣一成就任 ９．満洲事変
1932（昭和７）	４．高麗博茂、朝鮮に渡る。	９．満洲国建国
1934（昭和９）	10. 高麗神社奉賛会結成 『高麗神社の由来と奉賛会の趣旨』刊行 『高麗神社小記』刊行	
1936（昭和11）		８．第７代朝鮮総督 南次郎就任
1937（昭和12）	高麗興丸逝去	日中戦争勃発
1939（昭和14）	10. 高麗神社奉賛会、石灯篭を寄贈	

西暦（元号）	高麗神社関係（月日.事項）	朝鮮および一般史
1940（昭和15）	4.3　高麗神社と朝鮮神宮との間の樹木の交換 6.8　南総督高麗神社参拝 全朝鮮高等官、高麗神社に献灯	紀元2600年記念
1941（昭和16）	６．朝鮮総督府中枢院参議 狛犬を寄贈	12.8　太平洋戦争勃発
1942（昭和17）	8.1　高麗村で朝鮮半島出身の男女学生、勤労奉仕 11.21　李王妃殿下高麗神社参拝 11.28　高麗神社竣工式	５．第８代朝鮮総督 小磯国昭就任
1943（昭和18）	5.4　中央朝鮮協会と高麗神社奉賛会協賛の戦勝祈願 6.29　高麗神社、県社に昇格 10.10　文学報国会員、高麗神社参拝 10.15　高麗神社昇格奉告祭	
1944（昭和19）	5.15　小磯国昭総督、高麗神社参拝 6.3　文学報国会、皇道朝鮮研究会高麗神社に神木を献納	７．第９代朝鮮総督 阿部信行就任
1945（昭和20）		8.15　ポツダム宣言受諾、日本敗戦